

マレーシア海外教育旅行現地調査報告

市立札幌開成中等教育学校 教諭 飯野 修一

視察目的

今年（2016年）10月19日～24日に予定している本校5年生のマレーシア・シンガポール見学旅行の下見と、来年度以降の研修地・日程作成の参考とするため。

教育旅行地としてのマレーシア

1. 今回の現地調査の概況

今までに3回私的な旅行でマレーシアを訪問したが、今回は生徒を引率しての教育旅行という観点で参加し、10月の見学旅行の訪問地のうち、ホテルを除いてすべて回る事ができた。また、観光局、大使館、マラヤ大学、語学学校、マレーシア日本国際工科院（MJIT）の方々から説明を聞き、質問にも答えていただき、名刺も交換して、今後どこに何を問い合わせればよいのか大体把握できた。見学旅行に加え、マレーシアでの語学研修や大学進学も検討する価値があると感じた。案内していただいたガイドのファイズ氏は一流で、マレーシアに対する理解が深まり、HIS手配の食事もバラエティに富みおいしく、カンポンビジットの教育的価値も確認できた。自由時間に出かけたスリア KLCC とセントラルマーケットは、いずれも生徒を1～2時間自由行動をさせるのに最適な場所であった。何よりも、マレーシア政府観光局徳永氏のマレーシアに対する熱い思いと、ファイズ氏の日本に対する熱い思いに心を動かされた旅であった。



2泊したスリ・パシフィック・ホテル付近からのクアラルンプル(KL)市街の様子

2. 多民族国家としてのマレーシア

札幌からの海外見学旅行先として一般的な韓国、中国、台湾、オーストラリアなどと比較して、マレーシア・シンガポールの最大の教育的価値は「多文化共生」であろう。マレーシアはマレー系 67%、中国系 24%、インド系 7%と 127 の少数民族から成り立っており、イスラム教が国教で、イスラム圏の中で生徒を連れていける国を考えた場合、ほぼ唯一の訪問先といえる。高校生という頭の柔らかい時期に、他の民族の文化や言語を尊重して共存している社会を体験し、学校を訪問して同年代の生徒と交流し、カンポンビジットで実際の生活の様子を体験する中で、他民族やイスラムに対する正しい理解を深めることは、何物にも代えがたい経験となるであろう。

カンポンビジットという農村のホームステイプログラムは日本人が主な対象で、今回はパチタン村にお邪魔した。屋外では、パー



結婚披露宴で菓子をまく様子



ガイドのファイズ氏が盛り付けを指導

ムヤシの実の収穫、ゴムの木からゴムの採取法、ココヤシの収穫とジュースの試飲に加え、今回は村の結婚式の披露宴に参加する機会を得た。屋内では伝統的なおやつを食べ、マレーの伝統衣装の体験、ビー玉を出来るだけ多く集める「チョンカツ」という遊び、バティック（ろうけつ染め）体験を行った。またガムラン（伝統音楽の合奏）の楽器の演奏も体験することができた。生徒も十分楽しめそうである。

食事も多様で、マレー料理、中華料理（広東・福建・客家・海南）、インド料理（タミル系）、ニョニヤ料理（マレーと中華の混合）の4



ホームステイ受入れ家屋の外観



民族衣装体験。右の二人がホストのご夫婦

種類を楽しむことができる。ホテルの朝食バイキングでもこれらがもれなく提供されていた。また新王宮や国立モスクなどイスラム圏を強く意識する建築物を見たり、モスクの内部を見学したり（今回はプトラジャヤのモスクで見学）、セントラルマーケットで国内各地から集まった民芸品を見たりすることも異文化理解に役立つと思われる。



左より新王宮、プトラジャヤのモスク、その内部

3. マレーシアの国家計画・都市計画から学ぶ

日本とマレーシア・シンガポールの関わりで生徒に必ず押さえさせたいことは、1942年～45年の日本占領時代の存在である。マハティール首相のルックイースト政策の前には「日本占領時代にマレーシアの経済は停滞した」（KL シティギャラリーの展示より）歴史があったことを、当時の世界史の文脈の中で理解させたい。1982年開始の同政策により、これまで約16,000人の留学生・研修生が日本で学び、今マレーシアで一定の地位についていることは日本にとってアドバンテージである（日本大使館黒沼一等書記官の説明）。ガイドのファイズ氏自身、鳥取県米子市の高専へ留学していたとのこと。首都行政機能のプトラジャヤへの移転、クアラルンプル（KL）の再開発、国を挙げての観光立国の方針などから、高校生が学ぶことは多い。KL 国際空港のとんでもなく大きな施設、KL のペトロナス・ツインタワーをはじめとした高層ビル、2020年までに300の高層ビルを建設し、人口を600万人から1,000万人に増加させることを目指して進められる、KL のいたるところで見かける建設工事などからその発展の様子を実感できるであろう。マレーシアの発展モデルは、先進国の海外製造拠点が設置されることにより、

当初から輸出志向型の工業化の状態が実現される「プラットフォーム型」とされ、今や日本の大学に留学するメリットが少なくなっている（黒沼氏）。「2年ほど前に、シンガポールの大学生の人気企業100社に日本企業は入っていないという記事を読んだ。初任給が安すぎる、日本語は汎用性がない、外国人は役員になれないなどのデメリットから敬遠されるということだが、マレーシアではどうか？」と黒沼氏



ペトロナス・ツインタワーを望む夜景スポットで

に質問したところ、「同じです」という回答であった。MJITの教授によると、マレーシアの教え子が日本企業に就職しようと思っても親が反対するので、「給料は年々上がっていくから」と説得してようやく納得してもらった。ただし役員になるのが難しいので、ほとんどは10年ほどで転職していく。もっとも日本企業の現地法人の社長の年収が1,500万円では日本人以外は誰もやってくれないとのこと。このような視点も、現地へ来て、見て、聞いて初めて持てるものといえよう。

4. 観光立国の視点

東アジア・東南アジアの国々を旅行していて感じるのは、現地人ガイドの優秀さである。みな日本の大学や専門学校に留学し、流暢な日本語を身に付け、日本文化や日本人のことをよく理解しており、こちらが知りたい、してほしいと思うことを自然にやってくれる。もちろん自国の文化に対する知識も豊富で、自国を理解してほしい、楽しんでもらって日本に恩返ししたいという強い気持ちを感じる。翻って日本は、総じて観光に携わる人々が正当に評価されていない面がある。数年前から、中国・台湾・香港など中国語圏の観光客が大挙して北海道に押し寄せているが、日本人で中国語のガイドや対応ができる人はたいへん限られている。北海道は経済政策の中でも、インバウンドによる経済の活性化が最も現実的な方策の一つであり、観光にかかわる政策や産業振興を担う人材育成が求められる。

マレーシア政府観光局の説明によると、現在の目標は、①外国人観光客の増加、②滞在日数と出費の増加、③国内旅行の成長への刺激、④MICE（Meeting 企業の会議など、Incentive Travel 報奨旅行、Convention 大型会議・学会、Exhibition・Event 展覧会・文化／スポーツイベント）の振興、の4つである。KLの再開発計画にMICEの大型施設も計画されているかとの質問には、具体的な計画の回答はなかったが、現存の施設に加え大規模なMICEを誘致できる、集約的な施設が必要になるとのこと。

以上のような観点は、グローバルな視点でローカルの問題を考えるスーパー・グローバル・ハイスクール（SGH）のテーマの一つとしても重要であり、同事業の指定校である本校生徒にとって、教育的意義は高いと考える。

5. 語学研修・大学留学

マラヤ大学と英語学校協会（English Malaysia）を訪問し、語学研修と大学留学について話を聞くことができた。

マラヤ大学は大学生の語学研修の受け入れを積極的に実施しており、3週間の授業料（食費・滞在費込）は1,500米ドルである。受け入れはInternational Student Centreが窓口となっている。留学生は学部・大学院合わせて3,500名おり、90日を超える短期留学と交換留学は学生ビザが必要だが、夏季プログラムは不要である。授業は基本的に英語で行われるが、マレー語の授業であっても、大学の方針として「一人でも留学生がいれば必ず英語で教える」ことになっている。

英語学校協会には 20 以上の語学学校が加盟しており、一クラス 20 人未満で、一對一の授業もある。1 週 16 時間、3 か月で 200 時間が最低基準で、最長で 1 年間の学習となる。ICLS という語学学校は日本人が設立し 9 か国語を教えているが、英語には大学英語、集中コース、一般コースの三つがあり、東京と KL に日本人コーディネーターを置いている。KL の窓口は森さん japan@icls.com.my である。授業と宿泊がパッケージで提供され、安くて大学生の利用が多い学生寮、1~3 か月向きのアパート（ルームシェア…リビングを共有し、カギ・バストイレ付きの個室）、セキュリティの確かなホテルの 3 つのタイプから選ぶことができる。ホームステイはあまり一般的ではない。

滞在費が安いことなどから、マレーシアは日本人のロングステイ希望滞在国の 1 位を継続しており、また英語を身に付けさせるため長期親子留学の話も聞く。本校では以前実施していた語学研修を SSH や SGH の事業に振り替えているが、前期課程を主な対象に実施する場合、費用対効果という観点から、マレーシアでの語学研修を検討してみたい。

6. 自然観察・探求

今回の調査とは少し外れるが、マレーシアは熱帯雨林をはじめ、マングローブ林、サンゴ礁、高原、山地などの自然環境が豊かで、動植物の多様性の宝庫である。タマン・ヌガラ国立公園、ペナン島、ランカウイ島、キャメロン・ハイランド、マラッカなどを組み合わせて、自然観察・世界遺産等の文化財見学・現地との交流などを、SGH やスーパーサイエンスハイスクール (SSH) の事業の一部として実施することも検討したい。

7. まとめ



様々な料理: 左から飲茶、スチームポット、ニョニャ料理

マレーシアでの教育旅行の優位性としては、以上の 6 点のほか、①時差が 1 時間、②英語が通じる、③親日的で穏やかな国民性、④ホテルの教育旅行受入れの実績があり料金も安い、⑤食事の内容が豊富で生徒の口にもあう、⑥公共施設で WiFi がつながる、⑦病院も充実している、⑧両替を現地で用意しやすい、などがあげられる。

デメリットとしては、①移動に往復各 1 日かかる、②トイレの習慣にとまどう、③屋外と屋内・バスの中の温度差、くらいしか思いつかない。いずれも事前指導で対応できるレベルである。

大きな課題としては、保護者の理解を得ることである。マレーシアはボルネオ島の一部を除き、治安はよく安全と理解しているが、イスラムに対する誤解（なぜこの時期にイスラム圏の国に行くのか？イスラム＝危険）、7 月の KL 郊外での爆破テロ事件（万一何かあったら学校は責任を取ってくれるのか）、市内のある高校が今年はマレーシアをやめて訪問先をシンガポールだけにしたことなどで、保護者から不安の声が上がるのが危惧される。本校としては、予定通り実施したいと考えており、今回の現地調査も踏まえて丁寧に説明し、理解を得たい。